



異世界の創造者 ニコラ・ド・クレシー、 自作を語る

NICHOLAS DE CRÉCY

小野耕世 KOSEI ONO

フランスのBD作家のうち、亡くなったメビウスや、フランソワ・スクイテンに並んで日本で人気のあるBD作家とすでに言っているのが、ニコラ・ド・クレシーだろう。ここ三年のあいだに「フォリガット」「天使のピバンダム」「サルヴァートル」「レオン・ラカム」「氷河期」の五冊が翻訳されている。作品ごとには物語内容と描き手法、コマ割りなどが新しくなっていく。彼は主として描くのは、ここではない無様で色彩まばゆい別世界構築である。この絵がすば化しているBD作家は、第二回海外マンガフェスタのため来日、一月二日にアルチコール・ド・パンスに続いてインスタビューした。

幼児体験は、黒沢明の「テルス・ウザラ」

小野 生まれて初めて見た映画を覚えていませんか？

ド・クレシー 黒沢明監督がロシアで撮った「テルス・ウザラ」で、私が生まれて初めて見たワイドスクリーン映画だった。

小野 それは嬉しい。実は「テルス・ウザラ」は、黒沢映画のなかで、私が特に好きで、何度も観ていますよ。

ド・クレシー 私は一九六六年リヨンで生まれましたが、「テルス・ウザラ」は、たぶん七歳の頃、映画館で一目見ただけが、子ども時代の記憶として、筆がそよよだり粉木がゆつくりとさわめいたり、自然の描写のすばらしさが印象に残っている。古典的傑作だ。

小野 その頃から、すでに絵を描くのはお好きだったのですか？

ド・クレシー ニ、四歳か五歳ごろからペンとインクでいつもなにか描いていた。モンスターが登場する空想的な内容の私的BDを描いていた。見ていたのは「タンタ」や「アステリックス」などのヨーロッパの古典BDばかりだったけど、私の父はエンジニアで母は図書館司書だったが、両親ともサンベの絵が好きだった。サンベの本は図書館にあったしね。

小野 ジャン・ジャック・サンベ（Jean-Jacques Sempé）はルネ・ゴッティの「プチ・ニコフ」シリーズのイラストを描いていて、日本でも知られています。私も彼の面影を何冊か持っている。香港でも人気のある漫画家、マンガ家の息子（ナンジ）は私の友人ですが、彼もサンベのファンです。ただサンベは、物語マンガではなく一枚もののマンガやイラストの作家ですか？



天狗のピパントん

『天狗のピパントん』は、1980年代前半に制作された、日本初のデジタルアニメーション作品である。制作は、当時のデジタル技術を用いて制作された。制作は、当時のデジタル技術を用いて制作された。



ド・ウレシー 私は絵画もBDOもひとコマ作品も、すべて同じ見かたをしていいと思う。両者は映画などさまざまなものから影響を受けながら、BDOの場合は常にストーリーがあり、次のコマに読者の目を誘わなくてはなら

ない。そこが一枚ですべてを語る絵画やひとコマ作品とは違う。プロセスは異なるが、見る人ひとを感動させるという点では、すべて同じアートだと思う。だから私は、若いころはサンペの影響を受けたし、ドイツの表現主義の絵画やジョージ・グロツスの黒面に強い感化を受けている。

小島 フランスのブラック・ユーモアの画家ローラン・トポール (Roland Topor) も私は好きですが。

ド・ウレシー トポールは私も大好きだ。小島、そして、アングレームの美術学校でBDOを学んだんですね。どんな授業でしたか。

ド・ウレシー 高校を十八歳で卒業したときアングレームの美術学校が出来て、なにしろBDOを教える当時は唯一のアート・スクールだったので一応就いて入学した。でも、設立して一年目の内容は、ひどいものだったよ。授業なんて無いのもあった(笑)。現在はいい美術学校になっているけれどね。

小島 そのとき学生仲間と組んで、BDOを描き始めたんです。展覧生のシルヴァン・シヨメといっしょにヴィクトル・ユゴの短編『ビッグ・ジャンガル』をBDO化したのが最初の商品と書いていますが、いま絶版のようでは手できない。

ド・ウレシー あれは私の最初のアルバムだけど、商業的な内容で、いまは興味が無い。だから私の商業的なBDO第一作は「フォリガット」だ。ユマニッド・アソシエ社に私の絵の資料を見せて貰った。面白いからシナリオを書いてもって来てくれと言うので、やはり同級生のアレクシオス・チョーザに「三、四ページのシナリオを書いてもらったら、それで契約できた。二五年前のことだけだね。

ド・ウレシー この作品は一八歳のときに内容を編み立てた。自分のできることをすべて決めておいた。種々に書き足す必要がなかった。アクリル、水彩、グワッシュなど、多様なマテリアルを使ってストーリーを描かしたいと思いついた。同時に物語をわかりやすくす

ない。そこが一枚ですべてを語る絵画やひとコマ作品とは違う。プロセスは異なるが、見る人ひとを感動させるという点では、すべて同じアートだと思う。だから私は、若いころはサンペの影響を受けたし、ドイツの表現主義の絵画やジョージ・グロツスの黒面に強い感化を受けている。

ド・ウレシー フランスのブラック・ユーモアの画家ローラン・トポール (Roland Topor) も私は好きですが。

ド・ウレシー トポールは私も大好きだ。小島、そして、アングレームの美術学校でBDOを学んだんですね。どんな授業でしたか。

ド・ウレシー 高校を十八歳で卒業したときアングレームの美術学校が出来て、なにしろBDOを教える当時は唯一のアート・スクールだったので一応就いて入学した。でも、設立して一年目の内容は、ひどいものだったよ。授業なんて無いのもあった(笑)。現在はいい美術学校になっているけれどね。

小島 そのとき学生仲間と組んで、BDOを描き始めたんです。展覧生のシルヴァン・シヨメといっしょにヴィクトル・ユゴの短編『ビッグ・ジャンガル』をBDO化したのが最初の商品と書いていますが、いま絶版のようでは手できない。

ド・ウレシー あれは私の最初のアルバムだけど、商業的な内容で、いまは興味が無い。だから私の商業的なBDO第一作は「フォリガット」だ。ユマニッド・アソシエ社に私の絵の資料を見せて貰った。面白いからシナリオを書いてもって来てくれと言うので、やはり同級生のアレクシオス・チョーザに「三、四ページのシナリオを書いてもらったら、それで契約できた。二五年前のことだけだね。

ド・ウレシー この作品は一八歳のときに内容を編み立てた。自分のできることをすべて決めておいた。種々に書き足す必要がなかった。アクリル、水彩、グワッシュなど、多様なマテリアルを使ってストーリーを描かしたいと思いついた。同時に物語をわかりやすくす

ド・ウレシー この作品は一八歳のときに内容を編み立てた。自分のできることをすべて決めておいた。種々に書き足す必要がなかった。アクリル、水彩、グワッシュなど、多様なマテリアルを使ってストーリーを描かしたいと思いついた。同時に物語をわかりやすくす

ド・ウレシー この作品は一八歳のときに内容を編み立てた。自分のできることをすべて決めておいた。種々に書き足す必要がなかった。アクリル、水彩、グワッシュなど、多様なマテリアルを使ってストーリーを描かしたいと思いついた。同時に物語をわかりやすくす

全力投球をした「フォリガット」2



風吹けば雲が渡る
 1908年刊行
 著者：エドワード・ネッペン
 訳者：高橋 敏子
 発行所：講談社
 定価：1,200円
 文庫定価：500円

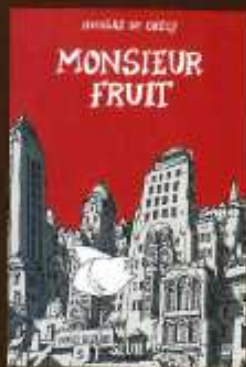


るようにころがけた。登場人物を区別できる
 よう、服装にそれぞれさまさまの柄を施し、
 そこにカラーシチュを用いた。
小野 その装飾的な服の柄がもしろい。ど
 こかクリムトの顔のような、濃い色調のなか
 らの白色の生かしがたも効果的で、はっとさ
 せませすし、カーニヴァルの舞台で歌う主人公
 の声か、街の人びとに移ってしまい、本人が
 曲を失う場面、支配者が市民の不満をそらす
 ため強行するカーニヴァルの狂騒が果てしな
 く拡大していく様子など見ごたえ詰まるたえ
 があり、この想像力は驚くはないですね。
ド・クレンシー この頃の私は、クリムトやエ
 ゴン・シーレの絵に惹かれていたんだよ。
小野 「フオリガット」は、技法は多形ですが
 物語は基本的には単純で面白いやうい。次の作
 品「天空のピバントム」は、「フオリガット」の
 筆名は純粋で解釈的ですが、約200
 ページあるので物語はさまざまに読んで複雑
 ですね。ニューヨークに生じるイメーシの
 都市が舞台で、そこに松葉杖をついたアザラ
 シのディエゴがやってくるから始ま
 る。

ド・クレンシー これはいわばもうひとつの世
 界の幻想のニューヨークです。
小野 歴史家がそびえ、多様な人物がひしめ
 きあつのがニューヨーク的ですね。それにし
 ても、街の支配者などの人間や、進化したよ
 うな天などの動物が共存するうえに、地獄の
 悪魔まで登場するのがすごい。このにぎやか
 でおかしな世界の構想はどこから？
ド・クレンシー シェスタ・登壇のときに見た
 イメーシや、ふと思いついた断片などもも
 とに物語を少しずつ作っていった。これは原作
 なりに描いた私の草稿の目録で、物語の大体
 はあるが、大抵のプランにすぎない。それに

よって「ニペーシ」を描いていくが、最初
 の考えと違ってしまったことで、自分を従かせ
 ていく。最初に結末は決まっていた。初め
 から決めてしまうと発想がつかぬ、弱さよれ
 てしまう。
小野 この街の市長を始め、権力者たちは自
 分勝手なストーリーを押しつけ、民衆を支配
 しようとする。その権力者と民衆の関係は
 「フオリガット」のテーマに通じています。二
 びどのようなひとつ目の民衆の描きかたも異
 様ですね。主人公である葉村ないなか世のよ
 うなディエゴは、いいように「ごきまわされ、
 みなを養いものにされていく。市長や学者た
 ちが主張するストーリーの言説の隙い空し
 き、読み込んでいくと、クロテスクを連中が
 いりぬれるこの世界は純粋なニューヨークの世界
 では、逆に悪魔がいちばん正気で純粋で、私
 にはちょっと可愛く見えてきました。これは
 いわば妖怪たちの世界なのでは？

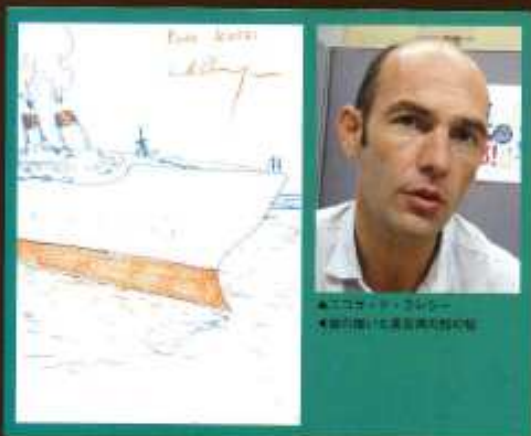
ド・クレンシー 「ピバントム」の宇宙は、非常
 に特殊なものだ。でも日本のマンガでは、そ
 うした世界にとくも近づいているのに感じ
 た。「ピバントム」を描いていた頃は、日本の
 妖怪についてなにも知らなかったけれど、あ
 とで知って、いまではとても親しんでいるよ
 うだよ。日本の神話としての妖怪にね。だから、
 妖怪のイメーシをたくさん描ってきた本不し
 げるのマンガはとても好きだ。
小野 「サルヴァトーレ」という夜目も、あな
 たの別世界ものの流れですね。ここでは人間
 と動物の地位が逆転している。
ド・クレンシー こうした設定にはフライングした
 信頼があつて、ジュディオという鳥のキャッ
 クターをむかし作った者がいる。まあ、想像
 のこの世界に展開しているから、なにか通っ
 た世界を作るのめがらにはあるんだよ。



『Monsieur Fruit』(原書)の表紙



『Monsieur Fruit』44



●シゲオ・フクダ
●東京国立近代美術館学芸員

ルーヴル美術館とたわむれる 3

小野 でも、もう少し大衆世界は、読者力をもちて描かないといけませんね。

ド・クレシー その世界のロン・ブック(雑誌)を、物語と絵の両方使って示していかななくてはならない。とても大切なことで、私はそう努めている。

小野 シルヴァン・シヨメが脚本を手がけた『レオン・ラカム』は、それまでの異世界ものとは違いますね。

ド・クレシー 「フォリガット」と「ピバンドム」は高密度で絵が中心の異世界だったが、次は、反対に現代の物語で、日本のマンガのように早く描けてストーリーが流れていく、いわばエルジェの「タンタン」式の単純な線で、同時代歴史のB/Dを描きたかった。シヨ

メの書くセリフに絵をつけるのは楽しかったよ。

小野 『レオン・ラカム』は日本のマンガ方式に、人物の顔のアップが多いですね。ほとんどコマが通んでいく感じ。

ド・クレシー だからこれは、脚本にもこだわってほとんど描き込んでいく映画監督のような気分を描いていた。これは「ア・スウィール」という雑誌に連載したのだが、雑切りに描かれるプレッシャーが、かえっていい結果になったように思うね。

小野 私は、氷河期も大好きです。未来の氷河期時代、ルーヴル美術館は氷河の底に埋もれていて、名作の絵が骨埋されても、だれも掘り出すことができないという皮肉……

ド・クレシー これはルーヴル美術館をテーマにしたB/Dシリーズの第一作だった。私は美術館をテーマも取材したが、なんのアイデアも浮かんでこない。たまたまアイスランドに旅行したら、氷の上に駐車禁止の立て札が出ていた。しかも氷の上に駐車する者なんているはずがない。この立て札に、いったいどんな意味があるのかと思った。そこから、氷河期に、ルーヴル美術館という巨大な構造物のある構造物が、なんの意味もない存在になつていたら……と考えた。つまり私は、この美術館の構造物とたわむれてみようとしたのだ。

小野 メガネをかけた学者のような犬が登場するのがとても魅力的でした。実は、それとそっくりな、メガネをかけて新聞を読む犬が人間の女の子と一緒に出てくるマンガが、日本にはあったの思い出して、ひとりりで笑ってしまいました。

ド・クレシー あの犬は、非常にコミュニケーション能力がある存在だった存在なのです。こ

の特別な犬だけが、悪か人懐きたちをしりぬに、歴史を感じると場所を持っている——という皮肉なんだけど、犬だから差別されている。私は歴史を別の形で示そうとした。

小野 最新作の「シュペール・ムッシュワ・フルイ」(Super Monsieur Fuit)は、とても軽快な作品ですね。

ド・クレシー 私はアメリカカのスーパーヒーローものは好きではないが、スーパーマンのパロディを描いてみた。いわばとったくラーウ・ケントの彼は、空に浮いてもバスに追いつく程度のスピードしか出せない。あえて三〇〇ページの小説の本で出したけど、すぐに一〇ページくらい描き終わらんだよ。

小野 これまでに見た特撮に好きな映画は？

ド・クレシー 宮崎駿の「千と千尋の神隠し」が、アニメを含むすべての映画のなかでいちばんすごいと思う。これは別の宇宙に連れて行かれた者の物語で、とても深く多くのことを感じさせるが、ふしぎな出来事についての説明はない。おとなの感情に訴える作品だ。またデヴィッド・リンチの映画「ブルー・ヴェルベット」(一九八五)がいい。やはり非常に謎めいた奇妙な感覚がある。

小野 クリムトやエゴン・シーレは、いまでも好きですか。

ド・クレシー いや、いまは例えはボナールの方がいいと思っっているよ。

そして身長一八九センチの長身の彼は、東京湾の船の印象を描いてくれた。なお彼は、シルヴァン・シヨメとはもう一五年も仕事をせず、口もきいていないと話した。もちろんそれには理由があり、B/D作家の仲間たちには知られている。